

バーンスタインを愛せなかつた日本

病身の天才指揮者に

「カネ返せ」と怒るとは

岩城宏之

(指揮者)



バーンスタインが亡くなつてからというものがやたらに悲しい。指揮する気力を喪失していると言つてもいいくらいだ。

我々の世界では大物の指揮者が死ぬと、「ひとりいなくなつて、万歳!」というようなどころがある。それなのに今回は無性に寂しいのだ。彼とは深いつきあいもなかつたし、直接世話になつたこともない。それなのに、この寂しさはいつたい、何なのだろうか。

バーンスタインはいつも自分のやっていることに無我夢中で、ひとつも秘密がなくて、

た長い第四楽章が始まった。

終了後、ソニーの盛田(昭夫)さんの家でパーティがあるので、先に行つて待つていた。ところが、二時間以上待つても来ないのである。

あの人はサインを求められたら絶対に断らない。しかも、小澤君が「レナード・バーンスタイン」というカタカナを教えてしまったから、全部カタカナでサインをするという驚異的なことをやっていたのである。それも六百人のファンに対して――。

遅れてやつと来た、と思ったら「腹すいた、腹すいた」と言つて焼き鳥を山のように食い、寿司を何十個もバクバク食つて、いろんなものをガブガブ飲んでワイワイ騒いだ。室内ブールがあるからみんなで泳ごうと言つて、沈めっこなんかしてギャーギャー遊んでいた。それから今度はビデオを見て「ワー、ここは素晴らしい」とか陽気に騒いでいる。それが自分の指揮を収録したビデオなのである。

それから彼はピアノを弾いた。「ラブソデイ・イン・ブルー」だった。自分の「ウエストサイド」を弾き語りしたり、サリヴァンの

駄々っ子で、ニガ笑いしたくなるほどのお山の大将で、そしてすごい天才だった。

初めてバーンスタインに会つたのはニューヨーク・フィルが来日した一九七〇年、大阪フェスティバルホールだった。小澤(征爾)君に連れていってもらつて樂屋に行つたのが、ミドル級のボクサーみたいのが、すつ裸でバカでかい白タオルくるまつていた。怒りで湯気が立つていて。その日の演奏の出来が悪かつたからで、「もうこんな樂団は潰してしまえ! なくなつちまえ! オレはニューヨークに帰る!」と怒鳴りまくつていた。

オペレッタ「ミカド」の歌を歌いだして「これがミュージカルの原点なんだ」とか言つて一幕くらい全部ひとりでやつて聴かせる。そして午前五時頃、彼は帰つて行つた。

その日、彼はニューヨーク・フィルと新日本フィルとのソフトボールの試合に出かけ、応援やら何やらにワイワイ騒いで、午後東京見物をし、夜はマーラーの長い長い九番を必死に振つて、六百枚サインして、しかも朝五時まで心底騒いだわけである。そのときぼくは「ああ、彼はスターなのだ」とつくづく思った。どんな場面でも自分が中心で、明るい主役をやつてしまふスターの典型なので、と。本番以外にパーティなどには顔を出ださない音楽家もいる。例えばカラヤンがそうだった。しかしバーンスタインは、生まれつきの本能的なスターであつたのではないだろう。

数年前、ぼくが最初の小説を書いて「話の特集」に載せたとき「指揮者でエッセーを書く人はいるけれど小説を書いた人はいないだろ、ざまあみろ」と威張ついたら、「バーンスタインが書いているよ」と言われたところ、ざまあみろ」と言つた。その小説の主人公は大変なワイン好きでドケチという指揮者。高いワインを買っては後悔したりするというただそれだけの話。それなのにすごく面白かった。

彼はやりたいことは何でもやつた。バイセクシャルだったと自分でも言つてはいるし、もし自分が原因で死んだとしても彼の偉大さを傷つけるものでもない。それはプラスでもマイナスでもない、全く関係のないことだ。関心のあることは何でも冒險せずにはいられないな

あまりの見幕にぼくたちは挨拶もそこそこ、逃げ出したことを覚えている。

それから数日後、東京でマーラーの「交響曲第九番」が演奏された。ぼくは舞台の袖で見ていたのだが、本当にびっくりした。長い第三樂章が終わつたら急にスタスターと戻つてきて、水をガブガブ飲む。お客様は指揮者がいなくなつたんで「どうしたんだ」ときよどんとしている。マネージャーのほうは心得ていて、さつとタバコに火をつけたりなんかしている。バーンスタインはフウーとタバコを吸つてまたスタスター出て行つて、そしてま

音楽家としての生き方に関しても革命児だったと思う。

アメリカの税法が変つて文化のためにならないとなればデモの先頭に立つたし、反核キャンペーんでは毛糸くずがぼくのところにも送られてきた。全世界の知り合いの指揮者に毛糸のくずを送つて「×月×日、あなたのオーケストラの団員全員がこの毛糸を腕につけ、全世界のオーケストラが反核の意志を表そう」というのだ。

数年前、ぼくが最初の小説を書いて「話の特集」に載せたとき「指揮者でエッセーを書く人はいるけれど小説を書いた人はいないだろ、ざまあみろ」と言つた。その小説の主人公は大変なワイン好きでドケチという指揮者。高いワインを買っては後悔したりするというただそれだけの話。それなのにすごく面白かった。

特選宿泊・食事プラン

ときには、二人
大人の休日。
ブルーライト・エポック

BLUE LIGHT
Epoch
お二人様62,000円
(一泊2食、税・サービス料込)

ブルーライト・エポックの特典

- ①海側デラックス・ツイン宿泊。
- ②特選フランス料理のフルコースディナーと、爽やかな朝食。
- ③バー・シーガーディアンでのウェルカムドリンク・サービス。
- ④ホテル内喫茶無料サービス。
- ⑤大仏次郎記念館(港のみえる丘公園内)入場券プレゼント。
- その他、フルーツバスケット、ワイン、記念撮影等のサービス。



お問い合わせは、

ホテル
ニューグランド
横浜

〒231 横浜市中区山下町10(山下公園前)
045-681-1841代

つたのだとぼくには思える。
その意味でカラヤンはバーンスタインと正
反対に位置するタイプの音楽家だった。

カラヤンが西洋音楽の正統の伝統を踏まえ
た指揮者の美をとことん追求した人であるな
らば、バーンスタインは一見、ど素人ではな
いかと思えるほどの天才だった。自分がこう
思つたらこうやるんだという解釈を含めて、
自分がそのとき本当にそう思ったことを全部
表現してしまった人である。

カラヤンは伝統の頂点を極めたが、バーン
スタインは破壊しながら自分の方法で世界を
征服した革命者である。自己を神格化したの
がカラヤンなら、バーンスタインは何もかも
さりげ出して、そしてみんなに愛されるスタ
ーだった。

バーンスタインの指揮の表現には、多分に
ウソもあつたろう、と思う。ところが彼自身
にうつては没頭しているからウソではなくて
本物なのだ。カラヤンのほうこそすつとうま
いことウソをついていたのかもしれない。

カラヤンの場合、おじいさんが食いつめて
ギリシャからオーストリアのザルツブルグに
出てきた。だから負けず嫌いでどんなことで
も一番でなければ気が済まなかつた。オース

勢いでいろんな人に電話をかけたらしい。あ
る人と長話をして、一度切つたのにまたその
人にかけて「バーンスタインはスーパースタ
ーだったけど、あの人の本当の良さを分かっ
ていたのはどれだけいるのか」と言つては隨
分絡んだらしい。

というのもNHKが放送した「バシフィック・
ミュージック・フェスティバル」の数日
後に行なわれた演奏会での出来事が頭にあつ
たからである。

七月十日、バーンスタインは東京・赤坂の
サントリーホールでロンドン交響楽団を指揮
していた。そのときに予定されていたプログ
ラムの三曲のうち一曲を若い大植英次君とい
う日本人に振らせたのである。そうしたらお
客が怒つた。「予告と違う。カネ返せ」と主
催者側に詰め寄つたというニュースを聞いた

トリア人でドイツを征服したという点ではヒ
ットラーに似ているところもある。

バーンスタインの場合も父親はアメリカに
渡つた貧しいユダヤ系のロシア移民だった
が、実業界で成功した。二人に共通している
のは指揮者だからむろん自己顯示欲がものす
ごく強いことである。カラヤンは帝王ぶりを

示すのが好きだったが、バーンスタインはガ
キ大将そのものだった。そうした彼の明る
さ、駄々っ子ぶりをアメリカ的と人は言う。

しかし、ぼくにはバーンスタインだけがもつ
てた個性としか表現できない。それほど
までに彼には天性の陽気さ、天才のもつ素直
さがあった。

札幌での瀕死の形相

バーンスタインが亡くなった十月十四日の

翌々日、NHKテレビで追悼の番組を見た。

それは今年の六月、札幌で行なわれた「バシ
フィック・ミュージック・フェスティバル」
の録画で日本に残つてゐる唯一のバーンスタ
インの生演奏のビデオだという。

ショーマンの「交響曲第二番」だったが、
すさまじい病人の顔で見ていられなかつた。

美しい淡路島の自然が
育んだ：

山廃仕込 日本名門酒会 加盟

都美人酒造株式会社 兵庫県三原町

079-420360

みやこびじん
都美人



からだろう、と思っていた。そうしたら十月九日に引退の発表があつた。

以前にバーンスタインに会った時はブクブクに太って非常に不健康で年の割には老けたなという印象だった。しかし、最近ヨーロッパのテレビで彼を見たら、随分元気そうだったでの喜んでいた。それが引退を発表した五日後に訃報が入ったのである。

作曲家が指揮を始めた

ぼくがバーンスタインを最初に意識したのは、彼の作曲家としての才能だった。昭和三十年代の初期の音楽雑誌かなにかだつたと思う。アメリカですごい作曲家が出てきた、というニュースが載っていた。彼の「交響曲第二番『不安の時代』」という作品が話題になつていて。

アメリカにはコーブランドなどの作曲家はいるけれど、我々の生きている時代に活躍するであろう作曲家は知らなかつた。それで注目していたら、その作曲家が指揮を始めたという。これはまったくばくの認識不足なのだが、バーンスタインは最初から作曲家であり指揮者でもあつたわけなのに、ぼくは優秀な

作曲家が指揮を始めたのだと勝手に思つていて。昔はマーラーもメンデルスゾーンもシュトラウスも作曲家であり指揮者でもあつた。最近は分業化のため、作曲家が指揮しても臨時の指揮者とならざるを得ず、ぼくら指揮者始めたんだな」という認識でしかなかつた。本当はそのときすでに彼はニューヨーク・フィルの指揮者だったわけで、これはぼくが知らなかつただけのことである。

「ウエストサイド・ストーリー」を初めて聴いたのはベギー葉山さんの家だつた。ベギーさんはアメリカに行つてミュージカルに夢中になつてしまつたのである。「ウエストサイド・ストーリー」の実演をブロードウェイで見てきた彼女は朝から夜まで口を開けば「ウエストサイド・ストーリー」の話で何十回とレコードを聴かされた。「ウエストサイド・ストーリー」の作曲があのバーンスタインだつたのである。しかもおそらく高度な作曲技法を使つていてびっくりした。対位法やフーガなどのあらゆる作曲技法といい、音楽的ハーモニーの複雑な使い方といい、あの曲はびっくりするほど高度なものを盛り込んでい

る。それでいて、ちゃんと一般受けするメロディもある。

ミュージカルというものはヨーロッパのオペレッタがアメリカに渡つてアメリカナイズされたが、本当の真のアメリカの音楽は「ウエストサイド・ストーリー」で出発した、とぼくは思つてゐる。ベギーさんのおかげで日本中が騒ぐ随分前から「ウエストサイド・ストーリー」に夢中だつた。当時ぼくらもミュージカルのとりこになつていて、昭和三十四年に大阪労音で安部公房作「可愛い女」を上演した（作曲・黛敏郎、演出・千田是也、指揮・岩城宏之）。主演がベギー葉山と亡くなつた。

海の香りの贈りもの
ばんばくのゆめり
●お求めは有名百貨店・名店街で

池田満寿夫

全版画

美術出版社

バーンスタインを愛せなかつた日本

一九七二年に刊行された「池田満寿夫全版画作品集」は既に幻の力タログ・レゾネとなつてゐるが、このたび、その後の作品を加え、五六年から九〇年の三四年にわたり、作品八九六点をオール・カラーレ再編集。資料性・実用性に加え、代表作八〇点を大判の国版で展開。美術愛好家、池田ファンにとつては必携の作品集となるであろう。

●判型二三三×二五五cm カラー一九七六年 縦一九二頁
上製・クロス表・函入り 定価二八〇〇〇円(税込) ●近日刊

た立川澄人で、これが日本最初の大掛かりなミュージカルだった。そんなわけで、ぼくは作曲家としてのバーンスタインもずっと尊敬しているのである。

ぼくは昭和三十五年に初めてNHK交響楽団と世界一周の演奏旅行に出た。日本のオーケストラが外国に出たのが初めてなら、その日程もインドに始まり、ほぼ全部の共産圏諸国、西ヨーロッパの主な国全部、最後にニューヨーク、ワシントンという八十日間の大旅行であった。その途中、ベルリンの音楽祭に二晩出演した。バーンスタインは別の会場で指揮していたのだが、ぼくは「あ、あの作曲家、まだ指揮してんのか」などといひどい認識をしていたのである。

記者会見があつた。ヨーロッパにしてみれば、日本から史上初めてオーケストラが来た

わけで、「東洋の国が西洋の音楽を演奏することをどう思うか」というような、我々にとっては愉快でない質問がたくさんあつた。そんな記者会見で、一人のカメラマンが「明日、あなたの音楽会と同じ時刻に別の会場でバーンスタインが振りますね。どうもオレはアメ公が嫌いでね。あなたの音楽会のほうが我々ドイツ人は喜びますよ」とゴマをすつた。

二十七歳で、アメリカなんて目じやない、といま思うとびっくりするようなこと

とを平氣でそのカメラマンに言つたのである。勝手に二十七歳がそう思つて、いたわけからなかつた。レコードを通じ、演奏を通じ、その行動を通じて、ぼくはバーンスタインの大ファンになつていていたからである。

二年前にアムステルダムで国際指揮者講習會の開催があつた。ヨーロッパにしてみれば、日本から史上初めてオーケストラが来た

会の先生をやつた。ぼくは教えることが嫌いで、指揮は教えるものでも教わるものでもないと主張していたのだが、気が変つて初めて先生なるものを引き受けることにした。若いプロの指揮者が百五十人応募してきた。それを二十人に絞つて、ぼくの目の前で振らせて最終的に八人まで落とした。その八人を三週間しごくスケジュールだ。

実際にオランダの国立放送交響楽団を振らせて「ぼくだつたらこうする。しかし、まねはするな。君が体を通してやりたいことを、もっとと違うことをやつてみろ」と朝の九時半から三時半までレッスンする。そのビデオを全部撮つて、みんなでとことんディスカッショーンする。夜は二時間半、レクチャーやをする。「指揮とは何か」とか「何のために指揮はあるのか」など、ぼくなりの考えを話す。

は語る

26



12年間に本を9冊出版した教師

宇佐美 覚了

(本学文学部英文学科卒)

大学卒業後、三年間貿易業務に従事、人材を育てる仕事をしたいと思いつつ、通信教育で教職課程をたまつ。一九六五年（昭和四十一年）から津市内の私立高田学苑の英語教諭。子育てに悩む

親、高校生たちを対象に、七八年から執筆を開始。「この一言で子供がグングン伸びる」「大逆転の受験術」など、著書は九冊。他、電話相談も二十年近く続けて

个性ある人材、个性ある学風。
南山大学
〒466 名古屋市昭和区山里町18番地
TEL(052)832-3111
テレホンサービス(052)834-6441

（朝日新聞 平成2年9月24日朝刊より）

いろいろな指揮者のビデオを見せたりしたが、結局、この講習会で使った教材の五分の四がバーンスタインだった。バーンスタインが一番参考になつて、素晴らしいからだ。しかし絶対にまねできない、してはならないのもバーンスタインである。

バーンスタインは練習のときはどちらかと言えばおとなしい。もの静かで冷静に「ここはこうしたほうがいい」と話しているのに、本番になると飛び跳ねてしまう。前もって用意しているのではなく、そのときの即興だろうが、それでいて棒がすごくまかつた。それほどでもない能力がやつたら危険極まりない指揮になつてしまつ。それはバーンスタインから発している放射能がそうさせるのであって、別の人もまねをしたらナンセンスとなりいいようのない動作なのである。

ウイーン・フィルとのブームスのシンフォニーにしても、なんでここをこんな解釈するのだろうと思ふほどぶち壊している。しかし、曲への洞察力を恐ろしく持つている人だから、バーンスタインがやるとウームと感心してしまうのであって、他人がまねができる仕業ではないのである。

一九六九年にニューヨーク・フィルをやめは愚作だと思われる作品があるので、ウイーン・フィルと演奏したものを聞いたら、これがまた面白い。バーンスタインが振ると「なんてつまらない」と思うものが意義をもつてくる。名作になつてしまふのだ。きっと、みんなが夢中になつているから面白くないのだろう。弾く人も聞く人もみんな、バーンスタインの発するオーラに刺激されてしまうのである。

おととし、バーンスタインが七十歳になつたお祝いの音乐会があった。ヨーロッパ中のどの国のチャンネルでもその音乐会を放映していたし、それ以外にもバーンスタインの特集を組んでいた。それで日本に帰ってきたら何もやつていなくて、ぼくは「なんて国だ！」と怒り狂つた。それで無理矢理、「題名のない音乐会」でバーンスタイン七十歳を祝

う番組を作つてもらった。

日本ではバーンスタインはカラヤンより認められていなかつたのだろうか。ヨーロッパではあれほどバーンスタインの七十歳を祝つたのに――。ヨーロッパではずっと愛されたいた、というのがぼくの実感だ。

日本ではバーンスタインが「ウエストサイド・ストーリー」を振るからというだけで聞くに行き、若い日本人に指揮を替えたからと言つて「カネを返せ」と怒つてゐる。

あの事件でぼくは日本がイヤになつた。バーンスタインの本当にいいところとか、世界で愛されていることとか、全然分かっていないのではないか。ただ有名だから、それだけのことなの。

自分のビデオを見てワイワイ騒いだバーティのとき、小澤君が「ユー・アーチ・ザ・モー！」と怒り狂つた。それで無理矢理、「題名のない音乐会」でバーンスタイン七十歳を祝

て自由の身になつてからのバーンスタインは常任といつていいほどウイーン・フィルを多く振つてゐる。最初、ウイーン・フィルなんぞでブギウギダンスなんかできるかと言つていた。それなのにバーンスタインのブギウギダンスに夢中になつてしまつた。夢中になればなるほど良いオーケストラでも音がはずれたりするが、そんなことはそつちのけの迫力が生まれてくる。だが、そればかり続くとオーケストラの機能が低下することがある。

バーンスタインはオーケストラを地道に育成するのではなく、消費し尽してしまつようなタイプの指揮者だと思う。若い指揮者を育てるのは好きだが、一方でニューヨーク・フィルのように出来上がつたものは破壊してしまう。ウイーン・フィルは固い伝統と基盤をしっかりと持つてゐる楽団だからバーンスタインがいくら引っ搔き回しても、まだまだコンビは続いたのではないだろうか。

マーラーはバーンスタインならとにかく聞くべきだ。マーラーはこの人のためにシンフォニーを書いたのだと、思わせるほどのすぐさがある。それから、これはぼくの好みだが、バーンスタインのハイドンが好きだ。これが実にはつらつとしていていい。彼が自分でピアノを弾いてオーケストラを指揮している「ラブソディ・イン・ブルー」もいい。瀕死の状態で指揮したシニーマンも素晴らしい。

以下、ぼくの薦めるバーンスタインを挙げてみる。

マーラーはバーンスタインならとにかく聞くべきだ。マーラーはこの人のためにシンフォニーを書いたのだと、思わせるほどのすぐさがある。それから、これはぼくの好みだが、バーンスタインのハイドンが好きだ。これが実にはつらつとしていていい。彼が自分でピアノを弾いてオーケストラを指揮している「ラブソディ・イン・ブルー」もいい。瀕死の状態で指揮したシニーマンも素晴らしい。

『合唱幻想曲』というベートーヴェンの中では

